京田辺市幼稚園・保育所(園)・認定こども園など幼児期の教育と

小学校教育の円滑な接続のための

幼小接続カリキュラム

幼小接続ファイル

京田辺市教育委員会

京田辺市幼小接続カリキュラム作成委員会

目次

１　はじめに　・・・・・・1

２　接続期のとらえ方　・・・・・・3

３　何を接続するのか　～接続期に育みたい力

「４つの視点」～について　・・・・・・6

４　カリキュラムの構成　～　どう接続するのか　～

（１）　大カリキュラム　・・・・・・・8

（２）　中カリキュラム　・・・・・・・10

（３）　幼児期の教育と小学校教育の接続を進める３つのカリキュラム

・・・・・・・11

５　資料　・・・・・・・22

６　おわりに　・・・・・・・62

1 はじめに

平成 27 年度より幼稚園・保育所・認定こども園、保育所型認定こども園の特性を活かした良質かつ適切な教育・保育、子育て支援を総合的に提供する体制を整備することを目的とした「子ども・子育て支援新制度」が始まりました。

平成 24 年に文部科学省が行った調査によると、ほとんどの地方公共団体が幼小接続の重要性を認識しています（都道府県 100%、市町村 99%）。その一方で、幼小接続の取組は十分実施されているとはいえない状況（都道府県 77%、市町村 80%）が未実施であり、その理由として、「接続関係を具体的にすることが難しい」（52%）、「幼小の教育の違いについて十分理解・意識していない」（34%）、「接続した教育課程の編成に積極的ではない」（23%）などがあげられています。

そういった現状を踏まえて、小学校新学習指導要領には幼児期と小学校教育の接続の重要性が以下のように示されています。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること。」また、「低学年における教育全体において、例えば生活科において育成する自立し生活を豊かにしていくための資質・能力が、他教科等の学習においても生かされるようにするなど、教科等間の関連を積極的に図り、幼児期の教育及び中学年以降の教育との円滑な接続が図れるよう工夫すること。特に、小学校入学当初においては、幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、生活科を中心に、合科的・関連的な指導

や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うこと。」とあります。

こういった新学習指導要領に記された背景から、本市においても幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続を目指して、幼小接続カリキュラムを作成することにしました。このカリキュラムにより幼児期に資質・能力を育む体験的・総合的な学びが、生活科「スタートカリキュラム」等を通じて低学年における各教科等の「見方・考え方」につながり、３年生以降の社会、理科、総合的な学習の時間等につながっていくと考えます。

京田辺市では幼小接続カリキュラムの作成に向けて、幼稚園・保育所の教諭・保育士と小学校の教諭によるワーキングチームを立ち上げ、1 年をかけて意見交換や協議を重ねてまいりました。

今後、それぞれの立場でご活用いただき、知・徳・体にわたる「生きる力」を子どもたちに育むための一助となることを願っています。

2 接続期のとらえ方

（1）　接続期における教育・保育の重要性について

平成 30 年度の改訂では幼児期の教育と小学校教育の接続期における教育が重要視されています。幼稚園・保育所(園)の幼児期の教育を小学校教育の先取り教育と捉えるのではなく、幼児期における遊びを通した総合的な学びから他教科等における学習に円滑に移行し、主体的に自己を発揮しながら、より自覚的な学びに向かうことが可能となるようにすることが必要です。そのためにも何より幼児期の学びと育ちに対する理解を前提として、児童が安心して小学校生活送り、自らの力を発揮しながら主体的な学習者として育っていく過程を作り出すことが重要です。

（2）京田辺市の状況について

本市では小学校９校、公立幼稚園７園・公立認定こども園１園がほぼ隣接し、連携行事等も充実して行われています。また、公立保育所も４所、私立幼稚園２園、私立保育園２園、私立認定こども園３園、私立小規模保育事業所３園、認可外保育施設３園があり、就学前教育が充実しています。年間を通して幼稚園・こども園・保育所(園)の合同研修会と、小学校教諭との研修会が行われており、互いの保育・教育を学ぶことができます。

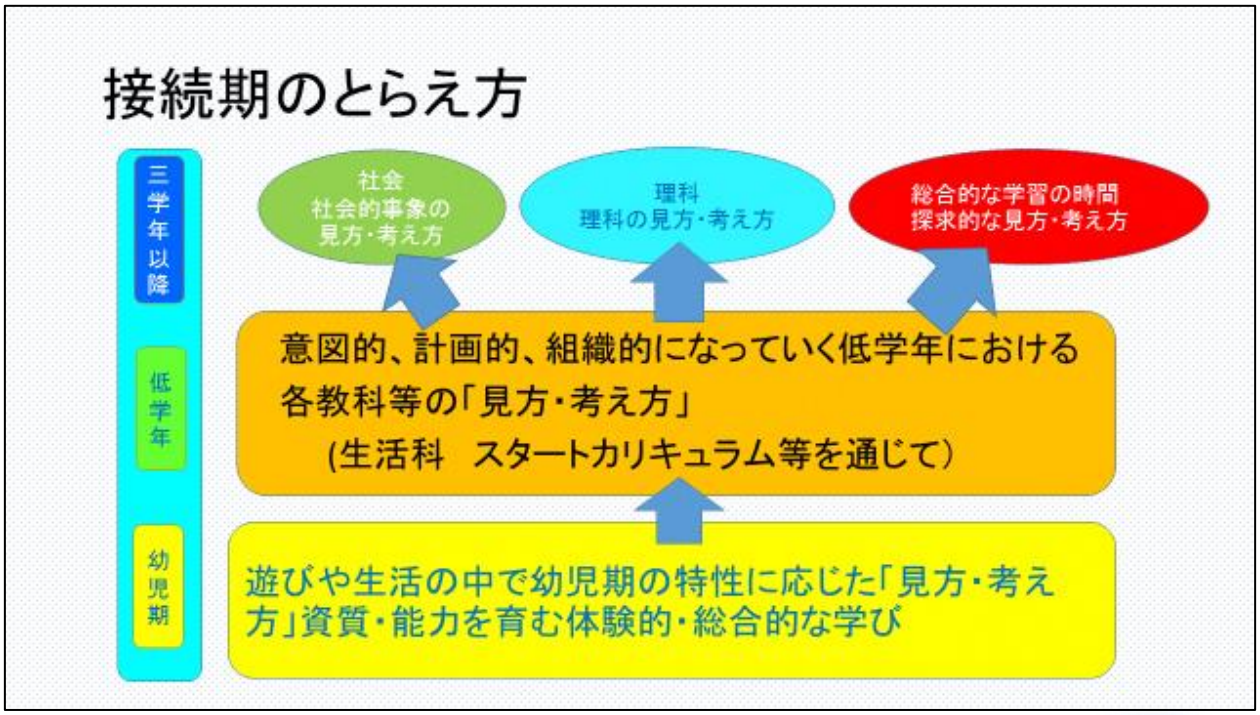
（3）接続期のとらえ方

円滑な接続は、幼稚園・認定こども園、保育所(園)と小学校の教育の違いを理解することが大切です。子どもの発達の違いから教育課程の構成や指導方法等、様々な違いがみられますが、子どもの育ちと学びは、幼児期と就学後ではっきり分かれているものではありません。幼児期の教育と小学校教育の違いと連続性を調和させ、何をどのように接続させていくのかを考えていくことが大切です。

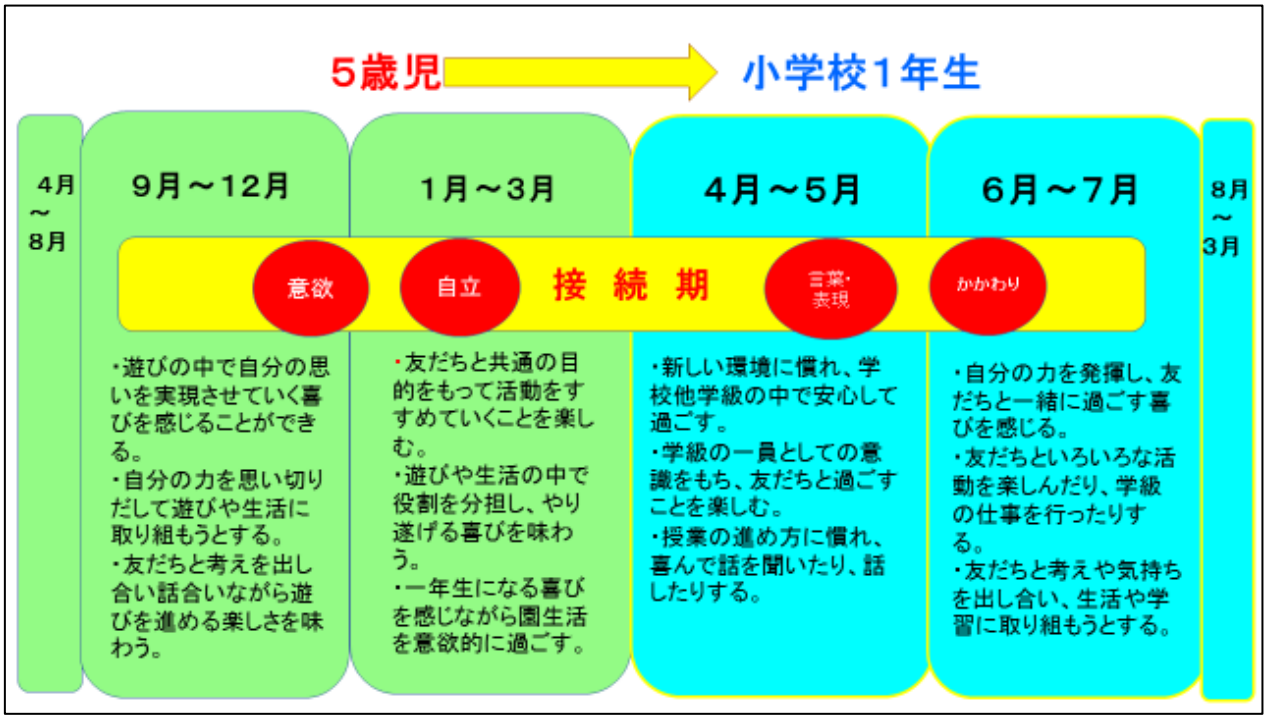
幼児期に適切な環境の中で培った遊びへの興味関心、意欲は、就学後の学習意欲や豊かな人間関係につながります。

幼児期の教育との連携や接続を意識した「アプローチカリキュラム」「スタートカリキュラム」については生活科固有の課題としてではなく、教育課程全体を視野に入れた取組とし、「スタートカリキュラム」の具体的な姿を明らかにするとともに、国語科、音楽科、図画工作科などの他教科等との関連についてもカリキュラム・マネジメントの視点から検討し、学校全体で取り組む「スタートカリキュラム」とする必要があります。

また、社会科や理科、総合的な学習の時間をはじめとする各教科等への接続を明確にすること。単に中学年の学習内容の前倒しにならないよう留意しつつ、育成をめざす「資質・能力」や「見方・考え方」のつながりを検討することが必要です。



本市においては、５歳児の９月から小学校１年生の７月までを４つに分けて接続期とし、接続期に育みたい力「４つの視点」について示しました。



3　何を接続するのか　～接続期に育みたい力「4つの視点」～について

(1)　全国学力・学習状況調査より明らかとなった本市の課題および特に育みたい力

ア　自己肯定感を高め、将来を展望する力

イ　主体的に学習に取り組む意欲や習慣

ウ　社会への関心や関わり

エ　豊かな言語能力（語彙と表現力）

オ　情報を活用し（他者や図書、ICT）深く考える力

(2)　本市学校教育で育む３つの「資質・能力」

ア「知識・技能」の基礎

→ **豊かな言葉と表現する力**

イ「思考力・判断力・表現力等」の基礎

→ **社会に目を向けより良く考える力**

ウ「学びに向かう力・人間性等」

→ **目標をもって進んで学ぶ力**

接続期に「自立」「意欲」「言葉・表現」「かかわり」の４つの視点を大切にしながら指導することが、３つの「資質・能力」の育ちにつながるものと考えます。

先輩先生からの
ワンポイントアドバイス！

日常の遊びに中にある学びの芽生えを意識しながら、保育をしましょう

子どもにとっては、「楽しいから遊んでいる」のですが、それにはねらい達成のための多くの環境・援助・かかわりがあります。楽しいから繰り返して遊んだり、挑戦したりするのです。子どもはその中で体験を重ね、様々な事を「学び」につないでいます。

幼児期の保育の仕方と小学校の教育の仕方は違います。形態や教科を真似るのでなく幼児期にふさわしい方法で保育をしましょう。

4 カリキュラムの構成 ～ どう接続するのか ～

(1) 大カリキュラム

まず、接続期を大きく見通してみましょう。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を「４つの視点」で再構成しています。縦に見るとその時期の子どもの姿がイメージできます。横に見ると子どもの姿の変化をイメージすることができます。

ア　幼稚園・認定こども園・保育所(園)と小学校が共有する 10 の姿

イ　接続期

４つの視点に基づき、子どもの姿を表した 10 の姿を共有してみましょう。

(資料１を参照)

(2)　中カリキュラム

指導がイメージしやすいように各期の保育・教育で大切にしたいことを「テーマ」、「ねらい」と表しています。幼児・児童の姿と合わせて指導をイメージしましょう。(中カリキュラムより抜粋　資料２を参照)

９月・１０月・１１月・１２月　テーマ　友達と一緒に遊ぶって楽しいな

ねらい

〇遊びの中で自分の思いを実現させていく喜びを感じる
〇自分の力を思いきり出して遊びや生活に取り組もうとする
〇友達と考えを出し合い話し合いながら遊びを進める楽しさを味わう

幼児の姿

☆友達と相談しながら自分達で遊びの場や内容を決め、自分の思いを出し、相手の思いも受入れながら遊びを進めていく面白さを感じるようになってくる。
☆大きな行事を経験したことが自信となり、いろいろなことに積極的に取り組むようになる。また、互いに認め合い仲間意識が深まる。
☆落ち葉や木の実を集めたり、名前に関心をもったり、使って遊んだりすることを通して自然物に対して積極的に働きかけ、数量の感覚を育んだり、生活や遊びに取り入れていこうとしたりする姿がみられる。
☆自分の考えと友達の考えの違いに気付き、折り合いをつけながら一緒に行動するようになる。

	４つの視点	◇環境作り　※保育者・指導者の関わり	活動・行事
自立			
意欲			
言葉・表現			
かかわり			

各期の姿を育むための指導の留意点を４つの視点に分けて記しています。保育・単元を構成する時に子どもの実態に合わせ具体化しましょう。

(3) 幼児期の教育と小学校教育の接続を進める３つのカリキュラム

ア　「アプローチカリキュラム」「スタートカリキュラム」の作成

イ　「生活科カリキュラム」の改善

ウ　ねらいを明確にした交流体験活動

本市では、新学習指導要領総則に則り、小学校に入学した児童がスムーズに学校生活へ適応していくための「アプローチカリキュラム」「スタートカリキュラム」の作成と、幼児期における遊びを通した総合的な学びを他教科等の学習へつなげていく「生活科」の工夫改善、これまでにも行われている幼小の「交流」教育の充実を３つの柱に、幼小の接続を推進していきます。

ア　「アプローチカリキュラム」「スタートカリキュラム」の作成

（a）「アプローチカリキュラム」「スタートカリキュラム」のねらい

子どもが、幼稚園・認定こども園・保育所(園)などの遊びや生活を通した学びと育ちを基礎として、主体的に自己を発揮し、 新しい学校生活を創り出していくためのカリキュラムです。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた指導を保・幼・小が工夫することにより、入学した児童に「明日も学校に来たい」という意欲をかき立てます。

たくさんの園から入学している、友達がいない子、経験したことのない生活…
子ども達は不安もいっぱい！！

一人一人の子どもが安心感をもてるようにしましょう。

幼児期には自発的な遊びが中心

各教科等の学習に円滑に接続をし、学習に意欲的に取り組めるように、自発性をベースにした学習、経験に基づく学習へ移行させましょう

先生とつながる、友達とつながる。そして徐々に集団を形成していく！

学習や生活の基盤となる学級集団をつくりましょう

（b）スタートカリキュラム作成上の留意点

一人一人の子どもの成長の姿から編成する。

幼稚園・保育所等の先生と意見交換をしたり、要録等を活用したりしましょう！

子どもの発達を踏まえ、時間割や学習活動を工夫する。

・

この時期の発達の特徴を踏まえ、20分や15 分程度のモジュールで時間割を構成したり、活動性のある学習を取り入れたりしましょう。

生活科を中心に合科的・関連的な指導の充実を図る。

自らの思いや願いの実現に向けた活動をゆったりとした時間の中で進めていきましょう。

安心して自ら学びを広げる学習環境を整える。

子どもが安心感をもち，自分の力で学校生活を送ることができるように学習環境を整えましょう。

（資料３、４を参照）

先輩先生からのワンポイントアドバイス！

スムーズな接続って何だろう？

幼稚園・認定こども園・保育所(園)を卒園し、入学してくる子ども達は、小学校入学への喜びと期待、そしてちょっぴりの不安も抱いていると思います。その期待や不安って？

やはり小さい子どもなりに小学校へ行ったら「勉強をするんだ！」「お兄ちゃん、お姉ちゃんになるんだ」「しっかりしなくちゃ」という気持ちで満ちあふれているからでしょう。ある意味それは私達、教師や大人が植え付けていることかもしれません。

幼児期でたくさんの遊びを通して培った「学びの芽生え」を小学校のスタートでうまく引き継ぎ、「自発的な学び」へとつなげていくためにも、小学校の先生も幼稚園・保育所(園)の子ども達の遊びの様子を是非とも参観する機会があるとよいですね。とっても勉強になりますよ。

（c)スタートカリキュラムの作成

1週目	**作成上の留意点**
	・１時間目の始めに、幼児期の教育でなじんだ活動を毎日帯状で取り入れることで、楽しく安心して遊びや生活が送れるようにする。 ・45 分１単位という考えではなく、生活科を中心とし、子どもたちの気付きや意欲を大切にした授業を展開できるようにする。 ・学校探検を通して、学校の施設に触れさせたり、様々な先生と出会わせたりすることで、小学校生活への円滑な導入を図る。
	教師の関わり
	・授業や生活の中で、幼児期の教育での遊びの要素を取り入れながら活動し、緊張感を和らげながら楽しめるようにする。 ・一日の学校生活の流れがわかり、生活に見通しがもてるような掲示物を工夫する。 ・幼稚園、認定こども園、保育所(園)との引き継ぎを基に個々の学校生活の様子等に気を配り、実態把握と共通理解を行う。
2週目	**作成上の留意点**
	・先週に引き続き、朝学習に幼児期の教育でなじんだ活動を取り入れることで、楽しく安心して遊びや生活が送れるようにする。 ・１時間目には、歌や音読などで元気に一日を始められるようにする。 ・音楽や国語、生活科など様々な教科で、新しい友達と触れ合う機会を多く設定する。
	教師の関わり
	・一日の流れの見通しがもてるような工夫によって子どもたちの不安を取り除く ・授業だけでなく休み時間の子どもたちの様子にも目を向け、コミュニケーションをとったり、一緒に遊んだりすることで不安感を取り除くようにする。 ・少しずつ教科学習に向かう気持ちや姿勢を意識させる。 ・グループ学習やペア学習など学ぶ形態を工夫し、主体的に学習に向かったり、新しい友達のことを知ったりすることができるようにする。
3週目	**作成上の留意点**
	・小学校生活のルールや話の聞き方などについて再確認しながら、45 分の授業に少しずつ慣らしていく。 ・朝学習は幼児期の教育でなじんだ活動、１時間目にひらがな学習というように、毎日帯状にパターン化することで、一日の流れをつかみ、見通しをもって安心して過ごすことができるようにする。
	教師の関わり
	・グループ学習やペア学習など学ぶ形態を工夫し、主体的に学習に向かったり、新しい友達のことを知ったりすることができるようにする。 ・配慮や支援が必要な児童についてはきめ細かに観察し、適切に支援を行う。 ・家庭訪問や日々の連絡等を通して、家庭での生活の様子を把握すると共に、学校生活の様子を知らせるなど、日常的に連携する。
4週目	**作成上の留意点**
	・45 分の時間割とするが、児童のペースに合わせた弾力的な時間配分を心がける。 ・疲れが予想される午後は、ゆっくり過ごしたり、体を動かしたりして気分転換が図れたりするような活動を取り入れる。
	教師の関わり
	・授業時間だけでなく、休み時間も人間関係が広がるように、全員遊び等を取り入れる。 ・学校のルールやきまりを繰り返し、丁寧に指導する。

さあ、子どもの実態をみて計画を立てみましょう！

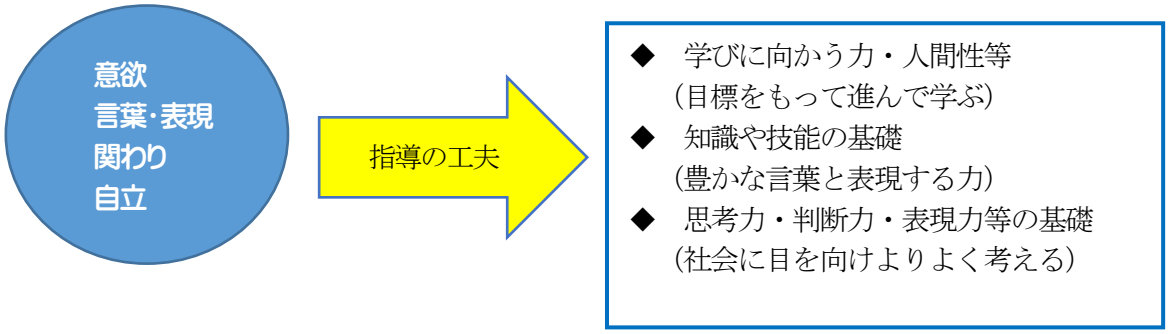
1週目	作成上の留意点
	教師の関わり
2週目	作成上の留意点
	教師の関わり
3週目	作成上の留意点
	教師の関わり
4週目	作成上の留意点
	教師の関わり

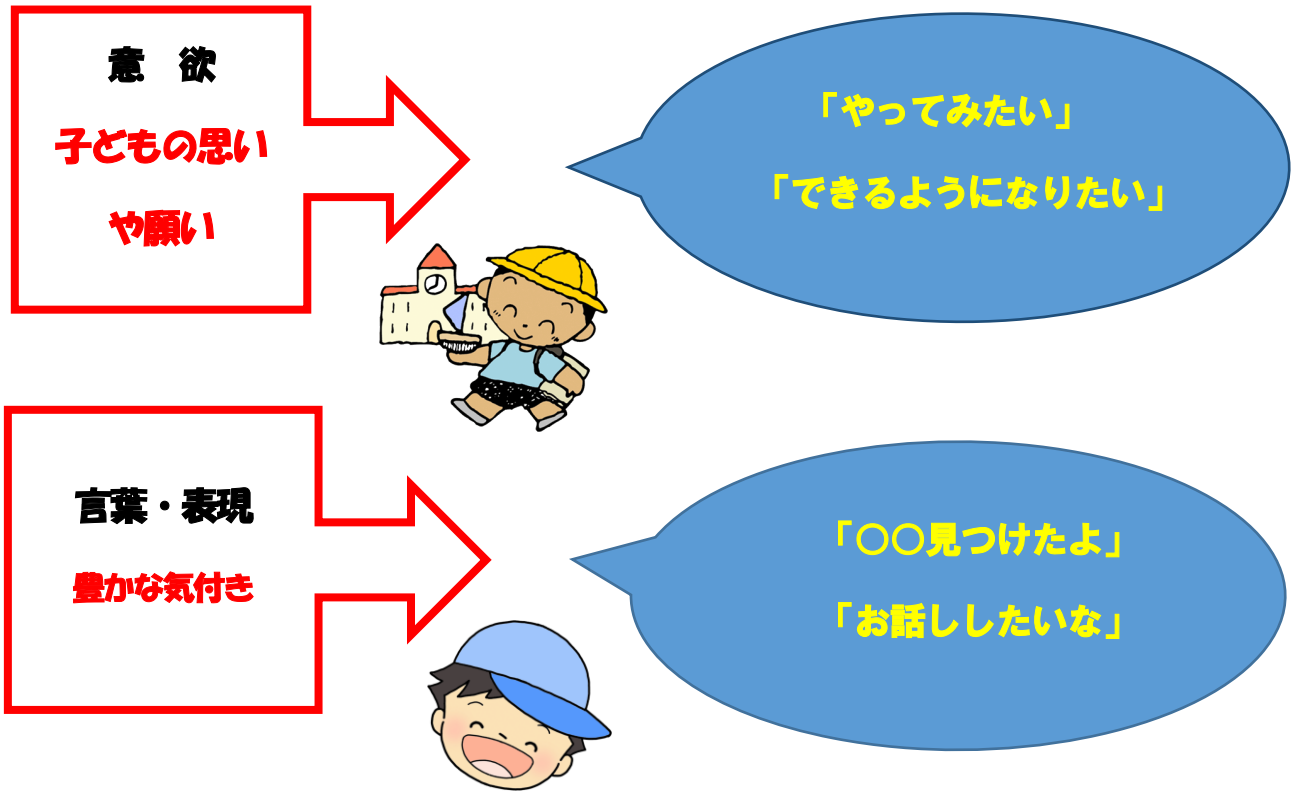
イ　生活科カリキュラムの改善

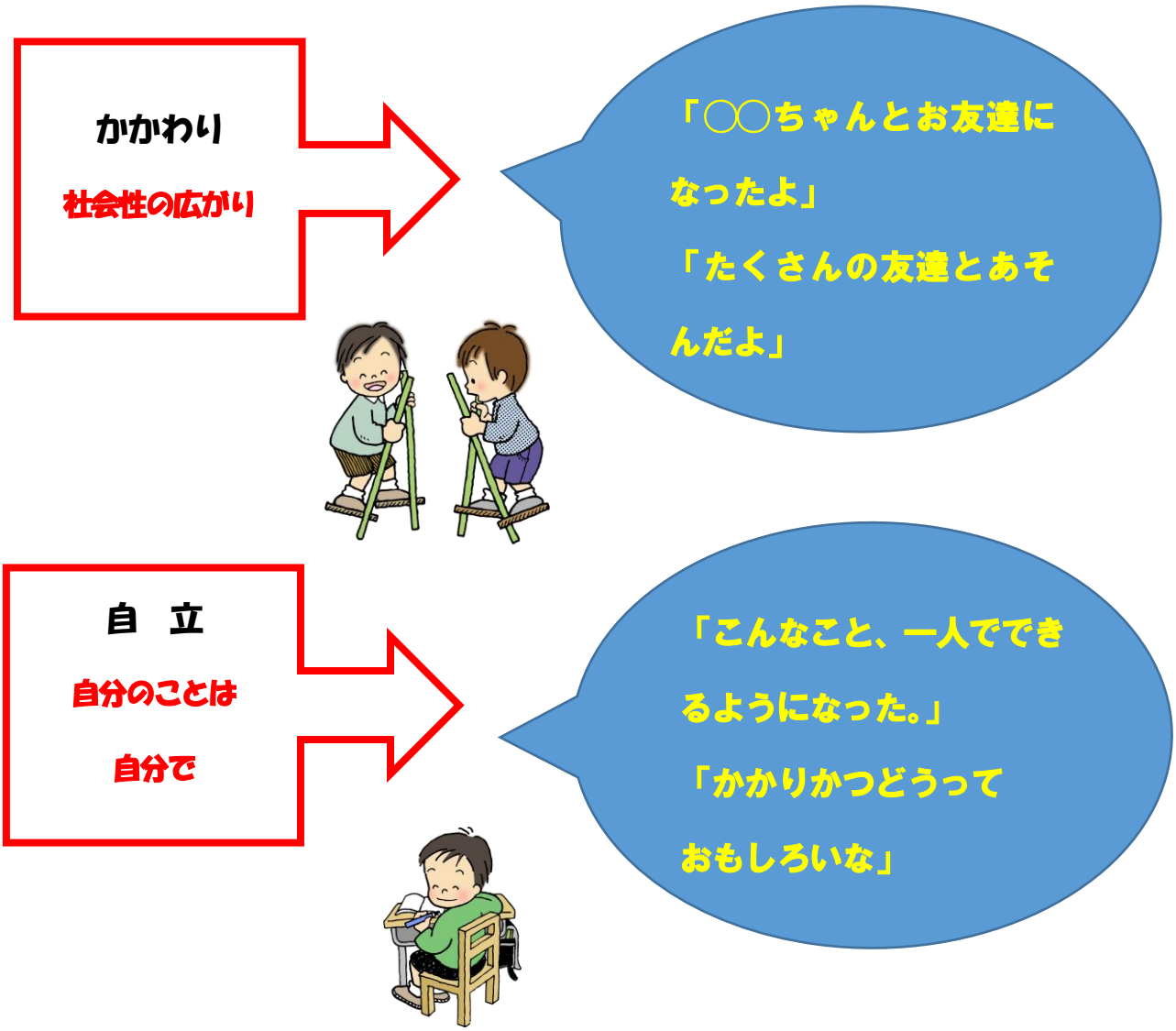
新学習指導要領総則では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関連を考慮することが求められています。幼児期の学びと育ちを土台とし、小学校での自覚的な学びへ向かっていけるよう、生活科を核として楽しいことや好きなことに没頭する中で生じた驚きや発見を大切にし、学ぶ意欲が高まるように活動を構成することが求められています。

（ａ）資質・能力の育成に向けた指導の充実・改善

４つの視点を意識した指導により、資質・能力を育成していく。







(ｂ)指導計画の作成・単元の構想（新学習指導要領　生活科解説より）

☆作成(構想)時の配慮点

生活科においては、一人一人の思いや願いから活動や体験をし、対象に直接関わることで感じ考えることを大切にする。そして、それらを表現することで整理を加えていき、学習の潜在的な価値を現実のものにしていく。その際、教師の適切な指導によって、児童中心の学習を進めていくには、特に以下の三つのことに配慮する必要がある。

①具体的な活動や体験が十分にできる時間を保障すること

②主体的な活動の広がりや深まりを可能にする空間的な視点をもつこと

③学習の対象にじっくりと安心して関わることのできる心理的な余裕をもつこと

☆生活科の学習課程

生活科においては、一連の学習活動の「まとまり」としての単元の中で、体験活動と表現活動とが繰り返されることで、児童の学びの質を高めていく。活動や体験を行うことが前提ではあるが、見方・考え方を生かして、学年らしい思考や認識や意欲等を確かに育成し、次の活動へつなげる学習活動を重視する必要がある。活動や体験は、教師の指示からではなく、児童の思いや願いから始まらなければならない。（中略）例えば、以下の学習過程を基本にし、何度も繰り返される中で、児童一人一人の深い学びを作り出し、気付きの質を高めていく。

①思いや願いをもつ

②活動や体験をする

③感じる・考える

④表現する・行為する（伝え合う・振り返る）

(資料５参照)

先輩先生からの
ワンポイントアドバイス！

子どもも教師もわくわくするような授業を！

幼児教育と学校教育の接続の最も重要なポイントは、「幼児期に遊びを通して育まれた自発性を、どう学習意欲へと転化させていくか」だと考えています。幼児教育で保育者が意図する遊びに誘う環境構成は、その大きなヒントとなります。幼児期の遊びと教科との結節点となるのが生活科であり、その改善は接続の大きな鍵です。今回作成した単元構想を手引きに、子どもも教師もワクワクする生活科の授業が各校で展開されればと願っています。

ウ　ねらいを明確にした交流体験活動

これまでから、小１プロブレム解消を主な目的とした「もうすぐ１年生」体験入学推進事業により、各学校で様々な交流体験活動等が行われています。これからは、幼小で一貫した資質・能力を育成するという観点から、幼小それぞれのねらいを明確にし、交流体験活動等を見直していくことが大切です。

(ａ)交流活動の課題とこれからの方向性

幼児と児童との交流は、小学校への円滑な接続に有効であるだけではなく、お互いに関わることの良さや楽しさを実感し、幼児や児童の学びを広げたり深めたりすることにもとても有効な機会になります。

例えば、小学校への入学に対して不安を抱いていた幼児が、小学生や小学校の生活に実際に触れることによって、入学を待ち遠しく感じるようになったり，児童に対して憧れの気持ちをもったりするようになります。それだけではなく、小学校で見たことや体験したことを遊びに取り入れたり、言葉や表現への関心が高まったりします。

また、児童にとっても、年下の幼児と関わる中で、「相手の気持ちを考えよう」「分かりやすく伝えよう」といった気持ちが生まれ、思いやりの心を育むだけでなく、相手を意識した活動を工夫したり自己の成長に気付いたりするようになります。

これまで、小１プロブレムの解消を主眼に、小学校への「慣れ」に重きを置いた体験活動が多く見られましたが、学びを広げたり深めたりする有効な機会であることを踏まえ、幼児と児童双方の資質・能力の育成を念頭に、交流体験活動を豊かにすることが大切です。

（b）交流活動を計画する上での留意点

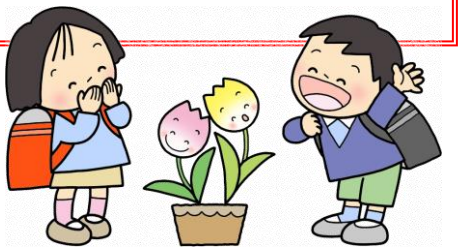
①イベント的な単発の活動で終わらせない。次の活動や交流が楽しみになるような継続性のある計画を立てましょう。

②小学校サイドの計画に、幼稚園・認定こども園・保育所（園）が参加をするのではなく、教師や保育士が話し合い、活動内容を作っていきましょう。

③それぞれのねらいが実現できるよう交流する子どもの姿を思い浮かべ、内容や環境づくり、支援について考えていきましょう。

④交流活動シートを活用し、活動終了後に合同で振り返りを行い、次の活動に生かしていきましょう。

⑤公開授業や公開保育の機会を利用し、日頃から教育・保育内容を知り、教職員の交流を深めておきましょう。



（資料６を参照）

資料

資料１　　大カリキュラム例

資料２　　中カリキュラム例

資料３　　アプローチカリキュラム例

資料４　　スタートカリキュラム例

資料５　　生活科単元構成例(1 年生４月～７月)

資料６　　保幼小交流体験活動例